外国語を学ぶ楽しみ／苦しみ——私の場合

香山はるの

編集部の先生方から「外国語を学ぶ楽しみというテーマで……」とご指示いただいたが、ここに書くことはあくまでも私個人の経験を中心にしたものであり、また実際のところ、特に後半の方では「外国語を学ぶ苦しみ」というテーマに限りなく近い内容になってしまうことを、あらかじめお詫びしておきたい。

XX年前の中学校、高校時代を振り返ってみると、私が英語を好きになったのは、おそらく試験の点数だとか、「英語は重要な科目だ」という考えとは別のところに、自分が夢中になれるいわば「遊び」の要素を見出したからかもしれない。たとえば初めて「仮定法」を習ったときのこと。「私が鳥だったら、あなたのところにすぐに飛んでいけるのに」という教科書の例文があった。「私は現実には鳥でないにもかかわらず、鳥だったらと仮定している、云々」といった授業での説明は「?」だったが、教科書の他の例文を自分で勝手に改造して、「あなたの愛がなければ生きていけないでしょう」といった「ラブレターに使えそうな文」をいくつか作り、生意気にも先生に半ば得意げに見せたことを思い出す。そして、主に英語をやりたいという理由で選んだ高校では、必修の英語の授業時間数が多かった上（色々な意味でこれが良かったことかどうかは単純には言えないが、私は生物も物理も学ばずに卒業してしまった！）、選択授業のクリエイティヴ・ライティングのクラスでは、皆で一つの童話を創ったり、校内で行なわれるスピーチ・コンテスト、夏休みの英国短期留学など、ある意味で「半分は遊び」の体験がさらに多くなった。カトリック系の小さな学校だったが、クラスには帰国子女やアメリカやオーストラリアからの留学生が数名おり、また、毎年海外に留学する友人、帰ってくる先輩たちがいた。この頃、こういったクラスメートと触れ合いながら、「英語が話せる」ということはどういうことか感覚としてわかったことは、幸いだったと思う。ただ一方では、話すことが最終目標にはなりえないし、また、自分は彼女たちとは別の

やり方で、英語を身につけなければならないのだとは漠然と感じていた。

さらに、もう一つ、特に思い出に残っているのは、シンディというアメリカ人のペンフレンドのことである。当時クラスで仲の良かったグループの間では、クロス・ワード、そして外国人のペンパルを持つというのが、なぜかはやっていて、私もご多分にもれず、シンディとの手紙のやりとりに夢中だった。そのうちに長い手紙のやりとりだけでなく、それぞれの国の行事や高校生の間で人気のあるスター等を写真付きで紹介したスクラップ・ブックなどという代物、さらにはお互いの声（短いスピーチ）を吹き込んだカセット・テープの交換までも（！）行なった。今でも時折「あ、これはあの時、シンディの手紙に出てきて覚えた単語だ！」という言葉と「再会」し、かつて必死で辞書を引きながら彼女と文通したことを、懐かしく思い出すことがある。受験勉強もしたが、「この語は自分が現実に使ったのだ」という実感は、「受験に役立つ英単語集」よりも、はるかに強烈だったのだ。

しかし、いつまでもこうした学習初歩レベルの「遊び」だけでは、限界がある。大学生の時には――特に四年生になって卒論に取り組むまでは――この点についてまだ自覚が足らず、（試験前の数週間を除いては）「大変」と思うほど全力で勉強に打ち込むこともなく、まして英文学を本気でやろうなどとは考えもしなかった。こういった甘えが見事に吹き飛ばされたのは、大学院時代である。たとえて言うならばそれは、それまでサークル活動で気楽にテニスを楽しんできた者が、突如体育会系のテニス部に入り直したようなものだったかもしれない。特に修士課程の時期は、本当によくシゴかれた。論文の内容についてはもちろん、英語についても指導教官のチェックは非常に厳しかった。言うまでもなく、英文学を学ぶ者にとって英語は単なる表現手段以上の意味を持つ。論文全体の出来具合にも影響すると言ってもいいだろう。指導教官は私の書いた英文を一字一句直すというわけではないが、先生が「まあこのくらいでいいかしら」とおっしゃるまで、私の方は何度も何度も「書直し」。根性がないので、「もう私にはこれ以上できない」と思ったことは数えきれないが、先生の熱心なご指導を前にして、そのお気持ちを裏切ることはできなかった。そこに私が見たのは、「たとえば、大工さんがカンナ一つまともにかけられないで建築論をぶったって何になる、と言うように、英語もできないで英文学なんてお話にならない」という（正確には他の先生のお言葉だが）至極もっともな、しかし、出来ない者にとってはまことに恐ろしい信念だった。度重なる「書直し」が続いた時など、一センテンス書くごとに神経がすり減っていくような思いだった。私の英語学習はまさにこの時期、「できた！」という一瞬の喜びを得るために大いに苦しむ、という方向へと変って

いったのだ。当時を振り返ってみると、あれは若いうちにしかできなかった、そして若いうちにこそ必要だった修業（？）の期間ではなかったかと思う。出来の悪い一学生のために多大なお時間を費やして下さった先生には、心から感謝している。

博士課程の時に一年間留学したイギリスでも、研究に関しては相変らず、喜びよりも苦労の方がはるかに多かった。徹夜してタイプを打ち、フワフワした頭で朝チュートリアルに行ったこと、図書館で眠ってしまった時（私のいたコレッジは午前2時まで開いていた）、見知らぬ学生（真夜中の同志？）が「ウェイクアップ」と言ってつついて起こしてくれたこと、言葉の面で大きなハンディキャップを背負った外国人の自分がなぜ英文学を学んでいるのか考えたことなど、色々と思い出す。しかし、研究を別にすれば、イギリス人のウィットに富んだ会話や皮肉なジョーク等に触れる楽しい経験もした。日々の些細な出来事を通して興味深い文化の違いを発見したり、日本的なやり方が通用しそうにない時には、「常識」というものは場所によって異なるのだとあらためて痛感したものだ。イギリスで英語を話しているHaruno Kayamaの考え方や行動が、日本語を話している自分のそれと微妙に異なっていくのを感じ、我ながら不思議な気持ちを味わった。

そして、こういった多くの経験を通じて知り合った人々の存在も、また貴重な思い出だ。私の印象では、概して英語圏の人たちは、日本人ほど「年齢の差」を気にせずに他人と関わっているように見える。これは言葉の違いによるところも大きいだろう。もちろん、ビジネスなど明らかに社会的な「上下関係」が絡む場合は別だが、基本的にI/Youから成る関係においては、年齢差のある人とも比較的「友達」になりやすいのではないかと思う。私にとって、今は亡きアイリーン・ダウがそういった存在であり、あるときは友人、あるときは母親のように異国にいる私を励まし、支えてくれた。彼女が膠原病の悪化で亡くなる二日前に訪れた病院で交わした会話を、私は生涯忘れないだろう！　それは実に些細な内容だった。ロシア人の太ったスチュワーデスのこと、娘セアラの夫についてのちょっとした悪口、孫に買ってあげた新しいブーツのこと、今晩の夕食のこと、「ピムズ」というイギリスのお酒のこと、デヴォンシャー名産のクロテッド・クリームのこと……酸素マスクをつけたアイリーンは後から思えば信じがたいほど元気で、よく話し、そして笑った。病室という非日常的な空間の中では、生と死、喜びと悲しみ、イギリス人と外国人といった境界は、限りなくかすんで見えた。

単なる一言語に過ぎないとは言え、英語がもたらしてくれた様々な体験や思いははかりしれない。